分科会Ｆ

11月12日（木）９：15～12：15／会議室３＋４

座　長　有限会社タナベメディカルサービス　代表取締役　田辺　智子　氏

座　長　グループホームほなみ　日下部　晃宏　氏

テーマ１：人材確保・行政支援策、人材育成・定着、業務改善・環境改善、生産性向上（ICT、ロボット）、物価上昇・高騰対策 等

テーマ３：グループホームケア、パーソン・センタード・ケア、自立支援、自己決定支援、フレイル予防 等

時間	演題 / 副題	所　属	発表者（都道府県）
9：15 〜	人は「役割」で変わる 〜 私から見えた、意欲の変化 〜	グループホーム　まんてん高月	ゴーティ ルオン （滋賀県）
9：25 〜	忠雄さんが選んだグループホームでの暮らし 私たちの「声」が届くまで	悠々の郷グループホーム	次藤　洋一 （宮城県）
9：35 〜	グループホーム・ケアにおける介護と医療の連携の実践 暴力・暴言行動を治すことは可能なのか？	グループホーム　いけぶくろの家	遠藤　　毅 （東京都）
9：45〜　発表①〜③　質疑応答（５分間）			
9：50 〜	認知症高齢者の安心した生活を支える環境づくり 職員参加型の環境分析からみえたBPSD軽減と転倒予防への取り組み	グループホーム　うぐいす	原　龍之介 （佐賀県）
10：00 〜	九人九色の花を咲かせよう！ 〜個別のミッションを通じた自己効力感の向上と温かな一体感づくり〜	グループホーム　うらやす	中村　雅人 （宮城県）
10：10 〜	共同制作への参加と関わり ちぎり絵でつながるみんなの輪	グループホーム・ グループホームエムズ赤坂	渡邊歩乃佳 （宮城県）
10：20〜　発表④〜⑥　質疑応答（５分間）			
10：25 〜	「バカ！」の言葉の裏側にある思い 〜隣で気づけた距離〜	社会福祉法人桜井の里福祉会 グループホームつどいの家・桜町	小野塚智子 （新潟県）
10：35 〜	犬との触れ合いがもたらした笑顔と意欲の変化 楽しみを持つことが生活意欲につながる支援の実践	株式会社アイシマ グループホームはなもも	澤内　明美 （神奈川県）
10：45〜　発表⑦〜⑧　質疑応答（５分間）			
10：50 〜	「服薬調整と非薬物療法を併用したBPSD軽減への取り組み」 〜本人が安心して暮らせる環境づくりを目指して〜	グループホームふくろくの郷	山口　順子 （京都府）
11：00 〜	「夕方のひと時を〝楽しみの時間〟へ」 「対応の時間」から「共に楽しむ時間」へ	グループホーム グレイスフル牛山	田中　裕美 （愛知県）
11：10〜　発表⑨〜⑩　質疑応答（５分間）			
11：15 〜	「眠りスキャンを活用した夜間ケアの質向上と業務改善」 〜利用者一人ひとりの状態に応じた見守りの実践〜	医療生協さいたま　生活協同組合 グループホーム　かしの木	南部　美恵 （埼玉県）
11：25 〜	障碍特性のある方と共に働く 障碍者雇用の事例から、事業所と職員が学んだこと	グループホーム　こもれび家族	大内裕美子 （東京都）
11：35 〜	外国人労働者の離職対策と処遇改善計画 外国人スタッフ育成とユニット連携の両輪	梅の宮マミーホーム	ユキ・大西美羽・スイ （宮城県）
11：45〜　発表⑪〜⑬　質疑応答（５分間）			
11：50 〜	新米ケアマネ　管理者１年生 〜これが管理者か ・・・〜	桜ヶ丘グループホーム	安藤　知里 （岐阜県）
12：00 〜	最初はみんなポンコツだった 未経験の人材を一から育てる	（有）みどりの風 グループホーム縄文の風	長沼　裕子 （宮城県）
12：10〜　発表⑭〜⑮　質疑応答（５分間）			
総　評			

演題番号
F－①

◆キーワード
1　役割
2　意欲変化
3　外国人職員

人は「役割」で変わる

～ 私から見えた、意欲の変化 ～

滋賀県・長浜市　グループホーム　まんてん高月（たかつき）

発表者：ゴー ティ ルオン　　共同研究者：まんてん高月スタッフ一同

認知症対応型共同生活介護　令和 2 年 5 月 1 日開設 共用型デイサービス併設	運営理念：のんびり　ゆったり　ほがらかに。 いつまでも自分らしい生活のお手伝い。

（取り組んだ課題・はじめに）
私は 2023 年 6 月に特定技能として来日した。母国ベトナムでは「介護は家族が家で行うもの」という考えが一般的であり、専門職がサービスを提供する日本の仕組みに当初は戸惑いを感じた。病院勤務を経て、「より深くご利用者と関わりたい」との思いからグループホームへ入職したが、言葉や文化の壁、認知症の方への関わり方に強い不安を抱えていた。今回報告する F 様（75 歳女性、要介護 2、認知症高齢者の日常生活自立度 IIb）は、認知症の進行により住み慣れた京都から実家へ転居された方である。F様は「京都に帰りたい」と強く希望される一方で、ご家族は「一人暮らしは無理」と判断されており、両者の思いには大きなズレが生じていた。その影響もあり、F様はデイサービスの利用に極めて消極的で、自宅では寝てばかりいるなど意欲の低下が著しく、ご家族も疲弊されていた。そこで、どうすれば F 様が自らの意思で前向きに利用できるかを検討した。
（倫理的配慮）
本報告にあたっては、ご本人およびご家族に対して趣旨を十分に説明し、同意を得た。また、個人が特定されないよう匿名性に配慮するとともに、介入にあたっては常にご本人の体調や意思を最優先し、過度な負担とならないよう細心の注意を払った。
（具体的な取り組み）
ケアマネジャーやご家族からの情報収集の結果、F様は元看護師として定年後も 65 歳まで勤務され、「人の役に立つことに価値を感じる」という強い価値観をお持ちであることが分かった。また、着付けや料理など多彩な特技も有されていた。これらを踏まえ、「利用者」という視点を「役割を持つ職員」へと転換する方針を立てた。外国人職員である私自身も、言語の壁はあるものの、ベトナムの文化と同様に人生の先輩を尊敬し「相手の立場で考えること」を徹底した。具体的な介入として、F 様には掃除や洗濯物たたみ、昼食の準備やおやつ作りをお願いした。その際、単なるお手伝いではなく、「職員として、他のご利用者ができるように補助してほしい」「見守りをしてほしい」と、「必要とされている存在」としての役割**を具体的に依頼した。F 様の意思を尊重しながらも、職員同士のような対等な馴染みの関係性を築くことに注力した。

（活動の成果と評価）
取り組みの結果、F 様に劇的な変化がみられた。

1．行動と心理面の変化：利用日が「仕事」として定着し、化粧をして迎えを待つなど身だしなみへの意識が向上した。頼られることが自信となり、「できることは何でもさせてもらいます」といった意欲的な発言が聞かれるようになった。

2．社会的変化：デイ利用そのものが「社会参加」の場となり、他者との交流が生活の刺激となった。

3．ご家族への効果と入浴の成功：自宅で数週間困難だった入浴が、「職員は仕事の汗を流して帰るので、F 様も一緒に」というアプローチにより、利用日には確実に入浴されるようになった。これは、単なるサービス提供ではなく「職員同士」という馴染みの関係性が築けた成果であり、清潔保持と共にご家族の介護負担の大幅な軽減に繋がった。

（今後の課題・考察・まとめ）
本事例を通じ、以下の 3 点を学んだ。第一に「価値観の尊重」である。「京都に帰りたい」という思いを否定せず、当然の感情として寄り添うことが支援の土台になると実感した。第二に「役割の力」である。「誰かの役に立ちたい」という願いは誰もが持つものであり、役割を持つことが生きる意欲につながる。第三に「認知症ケアで大切なこと」である。未知の場所に対する不安や恐怖を受け止め、その方の人生背景に沿って視点を転換する重要性を学んだ。私は一人の職員として、今後も言葉を超えた丁寧な向き合い方を大切にし、「その人らしさ」を支えるチームケアを実践していきたい。

演題番号
Ｆ－②

忠雄さんが選んだグループホームでの暮らし

私たちの「声」が届くまで

◆キーワード
1　自己決定支援
2　パーソン・センター
ド・ケア
3　グループホームケア

宮城県・気仙沼市

ゆうゆうのさと　ぐるーぷほーむ
悠々の郷グループホーム

すとう　よういち
発表者：次藤　洋一

むらかみ　りょうこ
共同研究者：　村上　涼子

令和５年 12 月　開設 1 ユニット　9 名定員	気仙沼市は国内有数の港町です。悠々の郷は自然に囲まれた市の北部にあり、入居されている方には、いままでの生活の継続を意識したケアを実践しています。

（取り組んだ課題・はじめに）

忠雄さんは、自宅で一人暮らし、冬季期間中に暖房機の選択に拘りがあり、安全に室温を調整できる機器の導入など他者の提案を受け入れず、ヒーター付近に可燃物を置くなどの火災の危険と、実際に本人が寒さから体調を崩すことがありました。　そのため、本人が希望してグループホームに入居しましたが、入居した経緯を忘れ、帰宅の予告をするようになりました。

（倫理的配慮）

今回、取り組みの発表をするにあたり、その内容について実名ではなく仮名を使用することで、家族より承諾をいただきました。

（具体的な取り組み）

忠雄さんは、冬季利用ということで期間を限定して入居しました。　ただ、入居当時から歩行時のふらつきがあり、家族と外出した先で転倒し、頭部と指先をケガしました。　忠雄さんより「長く利用したい」という希望があって期間を限定せず入居ということになりました。

ケガが回復して、令和６年３月頃より「自宅に帰ります」と職員に訴えるようになりました。　ケガをしたことを忘れ、入居前と同じように一人で暮らせると本人さんは考えています。

4 月下旬になり、忠雄さんは再び帰る話を東京から帰省した娘に話したところ、1 人暮らしの心配をする娘さんと口論となりました。　納得できない忠雄さんは、その夜、タクシーを使って自宅に戻り、数日の間、生活をしていました。　その様子を帰省した娘が見守り、数日間 1 歩も外へ出ない様子に家族とスタッフが対応を協議して、翌日に忠雄さんを交えて今後の話し合いを行いました。

これからの暮らしのこと、家族の思い、ご本人の考えなど話し合いは 2 時間に及びました。　忠雄さんの結論は　「2 週間後にグループホームに戻りたい」でした。　その間、わたしたちは食事を届けるなど見守りを行いました。　忠雄さんは自宅の片付けや草刈りを行おうとしていました。

2 週間後、自らタクシーを使ってホームに戻ってきました。

（活動の成果と評価）

今回の取り組みで得られたものは、説得ではなく納得です。　自宅を大切にすることは今までの暮らしを大切にすること。　また、グループホームでの暮らしはこれからの暮らしを大切にしていくという捉え方になると思います。　ここに至るまで、忠雄さんが望んだ実際の自宅での生活から、不便さを感じ、食事を届けながら介添えできたことで、私たちの存在を再認識し、ホームで暮らすことに納得されたという流れで、折り合いがついたのだと思います。

また、大きな成果として、転倒してケガをしたことを記憶障害で忘れてしまっていても、本人さんが自宅からホームに戻る約束は実行していただけたことが挙げられます。これは、これから一緒に過ごしていく上で重要となる信頼関係が高まったことに繋がると思いました。

（今後の課題・考察・まとめ）

今回の取り組みでは、ケガをしたという事故から仕方なくグループホームで生活しなくてはならないという流れではなく、食事の心配や孤立することなく過ごしたい思いが生じ、ホームで暮らしていくのも良いのではないかという、本人が自己決定できたことにあります。　今後、生活に拘りがある本人さんから様々な要望があると想像します。　それでも、理解できること分かることなど残存機能を理解した上でコーディネートをしていくことで、その拘りを支えていけたらと思いました。

演題番号
Ｆ－③

グループホーム・ケアにおける介護と医療の連携の実践

暴力・暴言行動を治すことは可能なのか？

◆キーワード
1
2
3

東京都・豊島区　グループホーム　いけぶくろの家

発表者：遠藤（えんどう）　毅（たけし）

グループホーム　いけぶくろの家	いけぶくろの家は、小規模多機能事業所に併設されており、認知症の方々が共同生活を通じて自立した生活を営む「家」です。

（取り組んだ課題・はじめに）
入居者 A 氏は、入居後にたびたび暴力、暴言行動を繰り返し、傷害も発生していた。職員からは、これまで以上に何らかの対応を求める声が届けられており、グループホーム運営上から同氏に対する検討が必要との判断から、介護記録をもとにカンファレンスを実施した。カンファレンスの結果、同氏のこれまでの結果から精神的な診断の必要性が生じて来た。令和 7 年 3 月 18 日に、健康長寿医療センターにて、MR 検査の実施をし、左側頭葉と右前頭葉に大きい脳梗塞があり、周辺部に萎縮が見られた。左側頭葉の言語中枢の影響によりコミュニケーションがとれず、イライラ感の原因のなっていることが分かった。
右前頭葉の自律・自制心を司る中枢に影響を与えていて、その結果、左側頭葉の梗塞によるイライラ感が出てしまうことに対して、混乱し、理性を失い、暴力、暴言に発展していたことも判明した。
総括して同氏に早く話しをすると混乱し、自制が効かなくなる為に、ゆっくりと話しをする。又医師とのやりとりで「 話しを聞いてくれる相手がいないか？」との質問に「今はいない。」との事で、職員が落ち着いて話しを聞くことも課題となった。

（倫理的配慮）
暴言暴力の問題行動に目を向けるのではなく、A 氏の話したいこと、気持ちをくみ取り、パーソナリティに目を向けケアにあたること。

（具体的な取り組み）
1.ご自身がわかる範囲内でのコミュニケーションをとるように務めて行ったことで、イライラ感が徐々に緩和されて行った。
2.夜間せん妄の原因が向精神薬の副作用であることを突き止め。向精神薬を変えたことで夜間せん妄はなくなり、夜間良眠へと繋がって行った。
3.朝、イライラされ傾眠されていたことから、朝食が終わると、居室へお連れして臥床していたのをやめて、昼は。体調不良の時以外はリビングで過ごして頂くようにした。トイレ頻回であったが、ご自身で更衣、一連の排泄動作が出来ないことに気づいてから、トイレの場所の案内だけでなく、付き添って一つ一つの排泄動作の見守り、ケアを行うようになった。これまで暴力を恐れて、トイレに介入出来ていなかった。

（活動の成果と評価）
各職員が A 氏へのケアのきめ細かさが出るようになってから、A 氏の出来ないこと、困りごとを理解するようになり、寄り添ってのケアが出来るようになった。又、一つ一つのコミュニケーションは A 氏の不安を解消し、現在、多少の苛つきが見られるものの、暴言暴力は激減し穏やかに過ごされるようになり、夜も良眠されるようになった。

（今後の課題・考察・まとめ）
抑肝散やレキサルティの向精神薬の服用はあるが、副作用からふらつきによる転倒事故があること、又新しい職員への A 氏のケアの難しさがあり、今後も医療連携、職員の教育が課題となっている。

（参考・文献など）

演題番号
Ｆ－④

◆キーワード
1　BPSD
2　環境
3　認知症

認知症高齢者の安心した生活を支える環境づくり

職員参加型の環境分析からみえたBPSD軽減と転倒予防への取り組み

佐賀県・有田町　　グループホーム　うぐいす

発表者：管理者　原（はら）　龍之介（りゅうのすけ）　　共同研究者：　スタッフ一同

認知症対応型共同生活介護　１ユニット　９名 （小規模多機能型共同生活介護と同一建物）	佐賀県有田町の自然豊かな所に施設があり基本理念５つのならばを基に利用者様に寄り添ったケアを行っています。

（取り組んだ課題・はじめに）
認知症高齢者にみられるBPSD（行動・心理症状）は、本人の不安や混乱を表すサインであり、生活の質の低下だけでなく、他利用者や職員にも影響を及ぼす。当グループホームにおいても、夜間の発声や不眠、歩行時の安全面など、利用者が安心して生活するための環境づくりが課題となっていた。これまで職員は、その都度対応を行っていたが、BPSDの背景にある要因を十分に共有できていない場面もあった。そこで、職員全員でBPSDが及ぼす影響について「本人」「職員」「他利用者」の視点から分析し、行動観察により評価を取り入れながら、利用者一人ひとりに合わせた環境調整に取り組んだ。

（倫理的配慮）
本発表にあたり、利用者及び家族へ発表の目的を説明し同意を得た。また、個人が特定されないよう匿名化し、個人情報保護に十分配慮した。
（具体的な取り組み）
まず職員でグループワークを実施し、BPSDによる影響について意見交換会を行った。
その結果、・本人の不安や混乱・睡眠への影響・転倒リスク・職員の対応負担・他利用者への心理的負担などが課題として挙げられた。その後、対象利用者2名について行動観察を行い、「いつ」「どのような行動があるか」「その理由は何か」を記録し、環境面から要因を分析した。
事例①
腰椎骨折による入院後、痛みや環境変化への不安から「お母さん」と叫ばれることが増えた利用者。
入所当初は時間帯に関係なく発声がみられ、睡眠も十分に確保できていなかった。そこで、安心して休息できるよう
（活動の成果と評価）
事例①では、腰椎骨折による入院後、身体的な痛みや環境変化への不安から「お母さん」と叫ばれることがみられるようになった。入所当初は時間帯に関係なく発声がみられていたが、ベッド周囲の環境調整や安心して過ごせる関わりを統一することで、現在は夜間の一部に減少した。
また、ほとんど睡眠がとれていない状態から、現在では 5～６時間程度の睡眠が確保できるようになった。睡眠状態の改善により、日中の穏やかな生活にもつながった。
事例②では、骨折後の身体機能低下によりシルバーカーの使用が必要となったが、掲示物の設置や収納場所の明確化を行った。しかし、使用頻度の大きな向上には至らなかった。
一方で、荷物をシルバーカー上に置く行動は減少し、転倒に繋がる危険場面の軽減につながった。今回の取り組みから、環境調整は行動変容を促すだけでなく、利用者の安全確保につながる支援であることが分かった。

（今後の課題・考察・まとめ）
今回の取り組みを通して、BPSDや転倒リスクは利用者本人の問題だけでなく、生活環境との相互作用によって生じることを再認識した。環境改善は大きな設備投資を必要とせず、職員が利用者の視点に立って環境を見直すことで実施できる有効な支援方法であると考える。今後も利用者一人ひとりの状態や思いに寄り添いながら、継続的な環境調整を行い、その人らしい生活を支援していきたい。

（参考・文献など）

演題番号
Ｆ－⑤

九人九色の花を咲かせよう！

～個別のミッションを通じた自己効力感の向上と温かな一体感づくり～

◆キーワード
1　ウォールアート
2　十人十色（九人九色）
3　創る喜び

宮城県名取市

ぐるーぷほーむ　うらやす
グループホーム　うらやす

なかむらまさひと
発表者：介護職員・中村雅人　　共同研究者：介護職員・鈴木善之

グループホームうらやすは、2006 年に、特別養護老人ホームうらやすの敷地内に併設して開設。2011 年東日本大震災で被災し全壊。2013 年東へ 3 キロほど移転して複合施設・地域防災拠点として再建された。	認知症グループホーム・障がい者グループホーム・特別養護老人ホーム・ショートステイ・ケアハウス・デイサービス・地域包括支援センター・居宅介護事業所・森内科クリニックなど。福祉と医療の複合施設である。

（取り組んだ課題・はじめに）
　これまで当ホームでは、利用者・職員が合同で制作した折り紙や色紙でリビングを彩り、単調になりがちな生活場面に季節感や華やかさを添えてきた。今回はこの取り組みを発展させ、日常の活性化につながるプラスアルファの試みを行う。利用者それぞれにゲーム感覚で取り組める日々の「ミッション」を設定し、達成の成果として自ら選んだ色の紙花を壁面の大きな木に一日一輪ずつ貼付することで、九人九色の満開の花を咲かせることを目指した。ミッションは個別の希望や状態に合わせて選定し、花が開いていくプロセスを視覚化することで自己効力感の向上を図る。毎日の楽しみを通じた創作の喜び、心身機能の維持活性化、利用者同士や職員間におけるコミュニケーションの促進など多面的な効果を期待するものである。綺麗な花だけでなく、曲がった花や破れた花、糊でベトベトの花も含め、それぞれの個性がそのまま尊重される温かな一体感のある空間づくりを目指した取り組みについて報告する。

（倫理的配慮）
　利用者およびご家族へ丁寧な説明を行い、プライバシーに十分に配慮した上で、無理のない範囲で取り組みを行うことに同意を得た。なお、写真の使用についての承諾を得ている。

（具体的な取り組み）
○　各利用者の花の色決定（全 9 色）：本人が希望する好みの色を選定し、九人九色の個性を表現した。
○　個別ミッションの設定：単に希望を聞くだけでなく、日常の何気ない対話の中で意向や潜在的なニーズを引き出し、個に応じた内容を設定した。

- **Ａさん：散歩（オレンジ）**
- **Ｂさん：Ｃさんの踊りに合わせた歌唱（水色）**
- **Ｃさん：Ｂさんの歌に合わせた踊り（牡丹色）**
- **Ｄさん：折り紙（紅桃色）**
- **Ｅさん：下肢体操（紫）**
- **Ｆさん：配膳前の卓上清拭（黄色）**
- **Ｇさん：他者との歓談（藤色）**
- **Ｈさん：花の制作（青）**
- **Ｉさん：塗り絵（緑）**

○　ゲーム性と視覚化の工夫：達成時に 1 輪貼付し、じゃんけんに勝利した際はボーナスとして 2 輪貼付できるルールを取り入れ娯楽性を高めた。顔写真・ミッション内容・花の色を一覧掲示し、進捗状況を各自で確認できる環境を整えた。
○　段階的な目標設定と記録：咲き具合（3 分咲き：お菓子、5 分咲き：カップ麺、7 分咲き：寿司等のレク）に応じてご褒美イベントを設定し、達成感の継続を図った。数日ごとに写真撮影で経過を記録し、満開時には全体で達成を祝う計画とした。

（活動の成果と評価）
　本取り組みは 8 月上旬より本格開始を予定しており、現時点（7 月末）では試行段階として取り組み内容の説明を行い、お試しで 1 輪ずつ花を貼付するまでに至っている。現段階では反応に個人差が見られるものの、視覚的に花が増加するプロセスの提示や職員による多角的な働きかけを通じ、徐々に参加意欲が醸成されることが期待される。今後は展開の過程で得られる予期せぬ変化や新たな気づきについても評価を行っていく。

（今後の課題・考察・まとめ）
　課題として、利用者の体調や感情に応じた柔軟なプログラムの見直しや、乗り気でない方への個別ペースに配慮した関わりが求められる。活気ある雰囲気作りや成果の視覚化を通じ、自発的な参加を促す環境整備を継続したい。本取り組みは単なるレクリエーションを超え、努力の可視化による自己効力感の向上や他者交流を生む契機となる。多様な個性の花々が集うことで、ホームに温かな一体感が生まれている。今後も一人ひとりの意向に寄り添い、共に達成感や喜びを分かち合える支援に努めたい。

演題番号
Ｆ－⑥

共同制作への参加と関わり

ちぎり絵でつながるみんなの輪

◆キーワード
1　本人の想い
2　関わり
3　役割

宮城県仙台市　グループホーム・グループホームエムズ赤坂（あかさか）

発表者：介護職員　渡邊（わたなべ）　歩乃佳（ほのか）　　共同研究者：　橋本（はしもと）　真理亜（まりあ）

地域密着型グループホーム　２ユニット×９名	グループホームエムズ赤坂の特徴は敷地内と近所に農園があり、地域の方々に協力を得ながら季節の野菜作りを行っている。自然に触れ、穏やかに生活を送ることができる施設になっている。

（取り組んだ課題・はじめに）
グループホームエムズ赤坂は、平成 29 年 4 月に開所した 9 名定員の２ユニットからなる地域密着型の施設である。仙台市の郊外に位置し緑豊かな自然とともに四季折々の自然を肌で感じることができる。敷地内の畑と施設から少し離れたと場所に農園があり近隣住民の協力を得ながら季節の野菜を育てる園芸療法を行っている。おひとりおひとりの個性・想いを大切に、創作活動やレクリエーションを行い毎日が笑顔で溢れている。

【事例紹介】
S 様　女性　80 代　要介護 2
アルツハイマー型認知症
エムズ赤坂で生活するＳ様は温厚な性格で日中の時間帯はホールに出て、気の合うご利用者とテレビを見て過ごされていたが、最近は 1 人食席にぼんやりと座ることが増えた。また居室とホールを何度も行き来する様子が見られるようになり、そうした行動を他利用者から指摘されると「ぼけて分からなくなった。」と不安を口にすることが増えた。このような行動や気持ちの変化を受け止め、本人の仲良く過ごしたいという思いに着目した取り組みについて報告する。Ｓ様が安心して他のご利用者と関われる機会を作ることを目的に、次の取り組みを行った。

（倫理的配慮）
個人が特定されないよう仮名を使用し、施設の倫理規定と全国認知症ケア学会の倫理方針に基づいて記載した。ご本人、ご家族、当施設へこの取り組みと発表の趣旨と内容について説明し同意を得ている。

（具体的な取り組み）
◎実行機能障害、コミュニケーション面への介入
【取り組み①】レクリエーション活動（ちぎり絵）への参加
【取り組み②】家事やお手伝いによる取り組み

（活動の成果と評価）
【取り組み①】
S 様には紙をちぎる役割を担っていただき、集中して参加されていた。他のご利用者から話しかけられると笑顔が見られ、「この紙を使って。」など自然な会話が生まれた。同じ空間で 1 つの作品を目指すことで、利用者同士の輪が広がった。
【取り組み②】
他のご利用者よりも職員が気づき介入することで本人の混乱、他利用者からのできないことに対する指摘が減少した。

活動を通して他のご利用者との自然なコミュニケーションが増えた。最近では自らソファーへ向かいテレビを見ながら楽しそうに話す様子が見られた。気の合うご利用者と関わることで穏やかな S 様を見る機会も増えた。以前から取り組んでいた家事にも意欲的に取り組むようになり、落ち着かない様子で居室とホールを行き来する頻度も減少した。

（今後の課題・考察・まとめ）
S 様の生活は、職員の関わり方やできることを見つけ生活の中に活かすことで穏やかに過ごす時間が増えていった。役割を持ち、周囲との関わりを実感できたことで自分にもできることがある、ここにいても良いという安心感につながったと考えられる。また S 様は何か不安なことがあると職員に声をかけてくれるようになった。不安になることはあるものの、職員が介入してくれることが心の安定につながった。分からなくなることに対しての不安に寄り添う支援や、他のご利用者への認知症への理解をどのように深めていくかが今後の課題である。今後も活動を通して、他利用者と関わるきっかけにつなげていきたい。日々変化していくＳ様の想いや状況を見守りながら、今以上にコミュニケーションを積み重ね、グループホームという共同生活を安心して、より快適に過ごしていただけるような支援を心がけたい。

演題番号
Ｆ－⑦

「バカ！」の言葉の裏側にある思い

～隣で気づけた距離～

◆キーワード
1　互いの困りごと
2　隣で過ごす
3　隠された思い

新潟県・燕市

社会福祉法人桜井の里福祉会（しゃかいふくしほうじんさくらいのさとふくしかい）　グループホームつどいの家・桜町（いえ　さくらまち）

発表者：介護職員　小野塚智子

平成 27 年 3 月開設　小規模多機能ホーム併設 2 ユニット定員 18 名	「住み慣れた地域でいつまでも暮らしたい」を基本理念とし、お一人おひとりのこれまでとこれからの暮らしを大切にしていくよう支援していきます。

（取り組んだ課題・はじめに）
Ａ様は呉服店で働いていたり、長年まかないを作っていたことから家事仕事全般が得意であり好んでされていた。入居当初は「何すればいいろ？」と野菜の皮むきや米とぎ等の得意な料理や外に出かけることを楽しみにされていたが、いつの頃からか朝起きてから日中のほとんどを椅子に座りテーブルに突っ伏して過ごされるようになった。また、他のご利用者を強い口調で繰り返し注意することも増え、関係性も悪くなり孤立していった。私達職員は、その強い口調を何とかしようと言葉のかけ方等様々なことをやってみたが一時の解決で終わっていた。隣に座って一緒に過ごして思いに寄り添うことで、Ａ様にも変化が見え本当の思いに気づくことができたことを報告する。

（倫理的配慮）
今回の発表にあたり、ご本人・ご家族に事例内容・写真掲載について了承を得ている。

（居心地の良い環境作り）
相性の合わないご利用者のふざけた仕草や言葉に対して「バカ！」と強い口調を発する。その言葉を聞いて私達職員も含め他のご利用者の方々もその場の雰囲気の悪さを感じ「バカ！」を言わないように、「喧嘩は止めましょう」「喧嘩するほど仲が良いんですよね」等言葉のかけ方を工夫したり違うことに気をそらしたり、相性の合わない方と席を離したりしてリビングの席を見直したりしたが、お互いに今までの席に自然と戻っており、その場しのぎの対応で終わった。
（一緒に過ごすことを重視した関わり）
職員が隣に座りテレビを見たり話をしたり、冗談を言い合ったりし、何かするのではなくただ隣に座って一緒に過ごすことを意識したことで安心に繋がり笑顔が増え、その時々の思いの「どっか行くか？」「刺身が食べたい」を聞き逃さずにやりたい気持ちの時に実行でき、本来のＡ様らしさを取り戻せた。

（Ａ様の役割を取り戻す）
息子様より「ずっと料理をしていた」、娘様より「頑張ってきた人なんですよ」との言葉も参考にＡ様の生活歴を再アセスメントし、周囲に対する気遣いもでき人付き合いも上手で社交的で冗談好き、話好きなこと、活動的だったことを再確認した。少し動くと「あー難儀」が口癖になっており体力的にも難儀ことは確かであった。調理の場はキッチンにこだわらず席で座ったままできる事をお願いすると引き受けて下さった。また、お願いする前には隣に座り一緒に過ごす時間を作ってからを前提とした。

（活動の成果と評価）
隣に座ってＡ様の思いに寄り添い、しっかりと向き合ってみたことで今までのように身体が思うように動かなかったり、自信を喪失しやる気がおきず無気力になっていた鬱憤が「バカ！」の言葉に置き換えられていたのではないかと感じた。ボソッと発した言葉の思いを叶えるために行動に移すことができたのはキッチンから聞こえる距離ではなく、隣に座って過ごした距離だった。その瞬間瞬間に気づけたことによりやる気にも繋がり、以前楽しみにしていた外出や趣味の編み物、得意な刺身を捌くことができＡ様らしい暮らしを取り戻しつつある。

（今後の課題・考察・まとめ）
私達職員が困りごとと思うことは目に見えて分かっている事であり、Ａ様の困っていることは「バカ！」の言葉の裏側にある目に見えないものに隠されていたのではないかと思う。それは他のご利用者全員に言えることであり、ご利用者の困りごとは目には見えず行動や言動の裏に隠れているものだと思う。
Ａ様の本当の思いを知るためには、2m離れた同じ空間ではなく、隣に座って一緒に過ごす距離だと気づいた。目に見える困りごとではなく、視点を変えて目には見えない隠された困りごとに目を向けていきたい。

演題番号
Ｆ－⑧

犬との触れ合いがもたらした笑顔と意欲の変化

楽しみを持つことが生活意欲につながる支援の実践

◆キーワード
1　BPSD の軽減
2　意欲向上
3　犬との関わり

神奈川県横浜市

かぶしきかいしゃあいしま　ぐるーぷほーむはなもも
株式会社アイシマ　グループホームはなもも

かいごしょく　さわうち　あけみ
発表者　介護職　澤内　明美

管理者　甲斐みずき

認知症対応型共同生活介護 グループホームはなもも	平成 16 年開設し、日々の暮らしの中で利用者様の個々のペースに合わせた日常生活援助をおこなうことにより安心と誇りのある生活を送っていただけるよう支援している。

（取り組んだ課題・はじめに）当ホームでは、ご利用者様が安心して過ごし、自然な笑顔や会話が増えるような関わり方について、日々のケアの中で考えていた。しかし、認知症が進むにつれて意欲低下がみられ、他の方との交流や活動への参加が難しくなるご利用者様も少なくなかった。そうした中、あるご利用者様のご家族から犬との触れ合いについてお話をいただく機会があり、その方の知人である飼い主様のご協力を得られることとなった。こうして、令和 7 年 5 月より月 1 回、家庭犬との触れ合いの会を開始することにした。今回は、この月 1 回の時間がご利用者様の心理面や行動面、そして他者との関わりにどのような変化をもたらしたのか、現場での実際の様子と取り組みを通して見えてきた課題についてご報告する。

（倫理的配慮）
・家族への主旨説明、写真を掲載する事への説明
・プライバシー保護

（具体的な取り組み）
当ホームでは令和 7 年 5 月より月 1 回ドッグトレーナー同行のもと犬とのふれあい活動を開始した。活動では笑顔や発語の増加、体操やリハビリへの参加意欲の向上、回想による他者との交流など多面的な変化がみられるようになった。一方で過去の愛犬との別れを思い出し参加を希望されない利用者もあり、個々の思いを尊重した支援の重要性も明らかになった。

（活動の成果と評価）
今回は 4 名のご利用者様の普段の様子と触れ合い会を実施するようになった後の様子を報告している。BPSD の軽減や意欲の向上、自発的に行動される姿が見えるようになったり、他者や職員との対話や交流が増えるようになっている。

(評価・考察)
犬とのふれあいの会を通してご利用者様に笑顔の増加、自然な発語、活動への意欲向上などの変化がみられた。
普段ご自身から動かれない方や、体操やレクリエーションに参加されないかた、言葉での意思疎通が難しい方でも見る、触れる、なでるといった非言語的な関わりを通して自然に参加する事ができた。
このことから動物とのふれあいを通じた関わりは認知症の進行により意思表示や活動参加が難しくなったご利用者様に対しても言葉だけでは引き出しにくいその方の感情や意欲を表出するきっかけになると考えられる。

(今後の課題)
今回の取り組みではご利用者様の心理面や行動、交流面に良い変化がみられた。
一方で実施頻度が月 1 回であるためその時間に得られた安心感や意欲を日常生活へどのように繋げて行くかが課題となっている。
また動物が苦手な方や不安を感じる方もいるため全員参加を目的とするのではなくひとりひとりの思いや状態に合わせて関わりが必要である。
今後は犬とのふれあいの中でみられた表情や言葉、興味関心を職員間で共有し日々のケアに活かしていきたい。

(まとめ)
犬と触れ合う事は単なる癒しを与えるだけではなく、ご利用者様が持っている過去の経験や思い、興味や意欲を引き出すきっかけとなった。
また言葉での意思疎通が難しい方でも関わりやすく安心感に繋がる点が大きな良さだと感じた。
さらに一般的な機能訓練のように声掛けの理解を前提とせず自然の関わりの中で心身機能の維持や意欲の引き出しにつながる点も有効だと感じた。今後もこの時間だけではなく日常の関わりにも活かしていくことが出来るよう工夫していきたい。

（参考・文献など）

・動物介在諸活動（動物介在活動・動物介在療法・動物介在教育）と獣医師及び獣医師会の役割

・NPO 法人　日本アニマルセラピー協会
https://animal-t.or.jp/index.html

演題番号
Ｆ－⑨

「服薬調整と非薬物療法を併用したBPSD軽減への取り組み」

～本人が安心して暮らせる環境づくりを目指して～

◆キーワード
1　ｸﾞﾙｰﾌﾟﾎｰﾑｹｱ
2　ﾊﾟｰｿﾝ・ｾﾝﾀｰﾄﾞ・ｹｱ
3　自立支援

京都府・八幡市　グループホームふくろくの郷（さと）

発表者：所長　山口（やまぐち）　順子　　共同研究者：　職員一同（しょくいんいちどう）

医療法人社団　紀洋会　認知症対応型共同生活介護 グループホーム　ふくろくの郷 開設　平成24年3月	法人理念「地域に根差した誠実でよりよい医療・介護の実践」

（取り組んだ課題・はじめに）
入居者が住み慣れた地域で安心して穏やかに暮らし、その人らしい生活を送っていただきたいという思いを大切にしている。しかしBPSDの出現により不安や混乱が強まり入居者本人だけでなく、周囲の入居者や職員にも影響が及ぶ場面が多くみられた。そこで症状のみに着目するのではなく、背景や思いを理解しながら、服薬調整と非薬物療法を組み合わせた支援に取り組んだ。

（倫理的配慮）
本取り組みについてはご家族に趣旨及び内容を説明し、理解・協力を得た上で承諾を得て実施した。また、個人情報の保護に配慮し、個人が特定されないよう匿名化を行った。

（具体的な取り組み）
M氏　現在92歳　女性　要介護2
2019年　認知症と診断
独居生活を送っていたが、服薬管理が困難となり、通信販売による多額となる購入や近隣住民の生活に影響を及ぼす行動がみられた。

2020年9月　ホーム入居
入居後も他の入居者や職員に対するBPSD（暴言等）が持続し、共同生活の継続が困難となる場面がみられた。その為、服薬調整と非薬物療法を組み合わせた支援を実施した。
非薬物療法では、本人の興味や生活歴を踏まえながら活動内容や関わり方を検討し、信頼関係が構築されている職員を中心とした対応や、さまざまな作業活動を試みた。
また、見慣れない入居者や職員に対する暴言も見られるようになったため、チームで検討し支援方法の統一を図った。

（活動の成果と評価）
服薬調整では主治医と継続的に情報共有を行いながら、その時々の状態に応じた薬物療法を実施した。
服薬調整後は暴言や拒否的な言動が減少し、穏やかに過ごされる時間が増加した。非薬物療法では、本人の興味や反応を踏まえて活動内容を検討した結果、貼り絵に集中して取り組まれる様子がみられ他の入居者と過ごされる時間も増えた。現在ではBPSDは軽減し、穏やかに生活される時間が増加している。また、見慣れない入居者や職員に対しては拒否的な言動や暴言が継続してみられていたが、信頼関係が構築されている職員が個別に関わり安心できる環境の中で紹介や説明を行うことで受け入れが可能となった。
時折BPSDの増悪がみられるものの、職員の適切な声掛けや関わりにより速やかに落ち着かれるようになった。

（今後の課題・考察・まとめ）
認知症では、見慣れない環境や人物への不安がBPSDを誘発・増悪させることが知られている。
認知症ケアにおいては、服薬調整と非薬物療法を組み合わせるだけでなく、本人が安心して生活できる環境を整え、その人らしさを支える支援が重要である。
本事例を通し、本人の生活歴や思いを踏まえた支援と状態に応じた服薬調整を組み合わせる事がBPSDの軽減とその人らしい生活の継続につながると考えられた。
今回の学びを今後の支援にも活かし、本人の思いに寄り添い、多職種やご家族と連携しながら支援を継続していきたい。

（参考・文献など）

演題番号
Ｆ－⑩

「夕方のひと時を〝楽しみの時間〟へ」

「対応の時間」から「共に楽しむ時間」へ

◆キーワード
1　夕暮れ症候群
2　コミュニケーション
3　職員の心理的負担

愛知県・春日井市

ぐるーぷほーむ　ぐれいすふるうしやま
グループホーム　グレイスフル牛山

たなか　ひろみ
発表者：介護職　田中　裕美

ぐるーぷほーむ　しょくいんいちどう
共同研究者：　グループホーム　職員一同

グループホーム　グレイスフル牛山は令和５年４月に春日井市牛山町に開設されました。グループホームは２ユニットです。	１ユニット９名、２ユニット合計 18 名の事業所でご利用者様は全員女性です。 平均介護度は 1.89 です。平均年齢は 87.2 歳です。

（取り組んだ課題・はじめに）
夕方の時間帯が帰宅願望などの夕暮れ症候群の広まりによってユニット全体が落ち着かない空気に包まれ、職員が対応に追われる時間となっていた。利用者様・職員のどちらにとっても心理的負担の大きい時間帯となっていた問題への取組みと成果を発表する。

（倫理的配慮）
参加については無理強いする事なく、利用者様の体調や気分に配慮し、参加されたい時に参加頂くよう活動を行った。

（具体的な取り組み）
職員が認知症介護実践者研修を受講した際の課題を基にユニット会議で振り返りと話し合いを重ね、取組みの目的・目標を明確にした。
1. 夕方に高まる帰宅願望を楽しい活動へ切り替える
2. 安心感を持っていただく事ができる対応
3. 生活リズムを整え、夜間の良眠に繋げる事
実際の取組みとして、夕方に「皆さんで楽しめるレクリエーションの場」を毎日設ける取り組みを行った。
職員が夕方の時間帯に対応できるように日勤職員を必ず配置し、遅番職員は入浴を担当、夜勤者は食事作りを行いながら、見守り付添いを行う事とした。
レクリエーションの実施にあたり、利用者様どなたでも参加できるように配慮し、皆さんに参加を呼び掛け、レクリエーションを通した利用者様同士のコミュニケーションを作り出す事を重視した。

（活動の成果と評価）
夕方のレクリエーションが習慣化するにつれ、利用者様同士のコミュニケーションが増え、夕暮れ症候群の頻度や程度は減少した。帰宅願望の強かった利用者様も「座って見ているだけ」から「お姉さんも一緒にやろうよ！」「こっちへおいで」と利用者様同士でもお誘いの言葉をかけて下さるようになり、「ちょっとやってみようか」と参加され、次第に楽しい時間を過ごしていただく事ができるようになった。ユニット全体に漂っていた落着かない雰囲気の夕方の時間帯が明るく楽しい雰囲気へと変化していった。
また、夕方の活動が適度な身体の疲れと利用者様同士・利用者様と職員との信頼関係ができた事で「楽しかった」「ここに居ても良い」という安心感となり就寝前の不安が軽減され、スムーズな入眠に繋がっていった。
認知症介護実践者研修が 2025 年 12 月に終了し、今回の取り組みを開始した。12 月開始時点で６名の方に帰宅願望などの夕暮れ症候群が見られ、3 名の方が入眠障害の不眠があった。取組後の 2026 年５月には軽い帰宅願望などの夕暮れ症候群がみられる方が１名に減少し、3 名おられた不眠の方は現在はおられない。
利用者様同士、利用者様と職員のコミュニケーションが増えた事で利用者様本人への理解や気付きが増え、ご本人を理解したうえでの配慮や気遣いをする事もできるようになった。利用者様の職員への信頼も上がり、夕方の時間帯が「対応の時間」から「共に楽しむ時間」へと変化した。

（まとめ）
限られた人員や時間・道具の中で時間帯に合わせた適切な関りが利用者様の安心感や生活の質に大きく影響する事を実感した。
活動そのものよりも「一緒に楽しめる」「『ありがとう』と支え合う仲間がいる。」「『今日も頼むね』と安心できる環境を作る事」が夕暮れ症候群の軽減や夜間の良眠への支援・職員への信頼に繋がった。
利用者様に落ち着いて過ごしていただく事ができるようになり、職員にとっても緊張感や焦燥感を強いられる時間から「利用者様と共に楽しむ時間」へと変化し、心理的負担が軽減した。今後も利用者様と職員が共に穏やかで安心して過ごす事ができる環境を整えていきたい。

演題番号
Ｆ－⑪

「眠りスキャンを活用した夜間ケアの質向上と業務改善」

～利用者一人ひとりの状態に応じた見守りの実践～

◆キーワード
1　眠りスキャン
2　夜間ケア
3　ケアの改善

埼玉県　草加市	医療生協さいたま　生活協同組合　グループホーム　かしの木

発表者：介護福祉士　南部（なんぶ）　美恵（みえ）　共同研究者：濵岡（はまおか）　佑介（ゆうすけ）　小河原（おがわら）　幸代（ゆきよ）

2022 年 3 月、草加市に開設したグループホーム　2 ユニット並列型　定員　18 名　平均介護等：3.0	当ホーム認知症対応型共同生活介護である。2 ユニット 18 名が生活し、一人ひとりの個別性を尊重し（自分が受けたいケア・自分が入りたい施設を目標に、多職種が連携しながら認知症ケアや看取り支援を実践している。

①取り組んだ課題・はじめに
当ホームでは、夜間の安全を守るため、決まった時間に居室を巡回している。しかし、巡回した時だけでは、利用者様の細かな状態変化に気づきにくいことがある。見守りが多く必要な方も、比較的落ち着いている方も、同じように巡回していたため、夜勤職員の負担も大きくなっていた。看取り期の利用者様が増え、状況変化を確認するため、訪室する機会が増えている現状がある。そこで、これらの課題を改善するため、眠りスキャンの導入を検討し、2026 年 1 月から運用を開始した。

②倫理的配慮
今回の発表にあたり、ご本人とご家族へ説明し、承諾をもらう。個人が特定されないように配慮、個人情報の取り扱いにも十分注意した。

③具体的な取り組み
眠りスキャンを活用するためのチームをつくり、利用者様ごとに通知の設定や見守り方法を見直す。通知や睡眠データに変化が見られた時は、職員だけで判断せず、訪問看護や医療機関とも情報を共有する。
転倒リスクの高い利用者様については、離床センサーと眠りスキャンを一緒に使用していた。
カンファレンスで検討、2026 年 5 月から眠りスキャンのみの運用に変更する。変更後も眠りスキャン通知のみで対応、転倒なく過ごすことができている。新しく入居された方の離床通知を受けて訪室したところ、居室内で床に座り込んでいるところを発見でき、通知設定を起床に変更、転倒なく過ごせるようになる事例もあった。そのほか、眠剤を中止した後の睡眠状態の確認や、看取り期の利用者様の状態をご家族へ説明する際にも活用できている。

④活動の成果と評価
現在では、日勤、夜勤に関係なく、職員が訪室する前に、眠りスキャンの画面を確認することが習慣になっている。利用者様が眠っているのか、起きているのかを確認してから訪室することで、その時の状態に合わせたケアができるようになる。ご家族へ睡眠や覚醒の様子を説明した際には、「状態が分かりやすい」「安心しました」という言葉をいただけた。2026 年 6 月からは、定時巡視を 2 時間ごとから 4 時間ごとに変更している。職員からは「睡眠のデータが見れることで巡視回数を調節できる」「眠りスキャンを確認してから安心して仕事ができる」などの声が聞かれた。眠りスキャンでのデータ、通知を確認してその時々、ケアに組み合わせることで、安全を守りながら業務負担を減らし、夜勤職員の仮眠時間の確保にもつながっている。

⑤今後の課題・考察・まとめ
眠りスキャンだけで利用者様の状態を判断せず、状態の変化に気づくための一つの手段として、とても有効だと感じている。今後は、覚醒している時間に合わせ、トイレ誘導するなど、排泄支援ができると睡眠の質の向上がはかれ、機器のデータと職員の目による観察の両方を大切にしながら、一人ひとりに合った夜間ケアと看取り支援につなげていく。

演題番号
Ｆ－⑫

障碍特性のある方と共に働く

障碍者雇用の事例から、事業所と職員が学んだこと

◆キーワード
1　人材確保
2　人材育成
3　共生社会

東京都・府中市　グループホーム　こもれび家族（こもれびかぞく）

発表者：ﾕﾆｯﾄﾘｰﾀﾞｰ　大内　裕美子（おおうち　ゆみこ）　　共同研究者：　門屋　宏明（かどや　ひろあき）

株式会社　佐藤総研　グループホームこもれび家族 2006 年 9 月開設　２ユニット　定員 18 名 毎月第４土曜　こども食堂開催 社協、地域包括と連携し地域ボランティア活動の一員として事業所で登録し相互協力体制を構築。	企業理念「Smile is power　みんなの笑顔が私たちの力」に基づき、利用者様やご家族、職員と職員の家族、地域の方々が笑顔になれる運営を目指します。

（取り組んだ課題・はじめに）
企業の従業員数に応じて障碍者雇用が義務化されている中で、障碍特性を持っていても「介護の仕事に就いてみたい」とチャレンジしてきた就業希望者に対して「介護従事者」として適切な人材育成をおこなえていない事業所側に幾つか問題があるのでは？と感じた。
障碍者雇用に積極的な人材育成を試みた結果と、事業所や職員の考え方の変化を報告する。

対象者情報
男性（1981 年生まれ）
2000.3 月：高等専修学校卒（調理の専門教科）。
2000.4 月：新卒採用で飲食店に就業する。
2005. 夏：自宅へ引きこもり就業が困難となる。
2020：自閉症スペクトラム診断。
2021.3 月に精神障害者保健福祉手帳交付。就労移行支援事業所で訓練開始。
2023.4 月：当事業所で実習開始。42 歳、無資格。

（倫理的配慮）
発表に関して関係者に説明し了承を得ている。

（具体的な取り組み）
・事業所の職員で障碍者雇用について話し合う
　過去に障碍者雇用の職員と働いて思ったこと
　職員が望む雇用とは
・実習希望者への面談を随時実施
　受入間口は広く設ける
・実習前の事業所準備
　現場職員と実習希望者の情報を共有する
・実習期間は双方の観察期間
　実習生と事業所のアセスメント
・実習期間の延長
　身体介助を実践してみる
・実習終了時の振り返り
　就労移行支援 CW を含めた三者面談の実施
・非常勤職員としての雇用へ
　６H/３回/週。チューター制度での試用期間３ヶ月
・毎月の三者面談（対象者/事業所/就労移行支援 CW）
　対象者の様々な思いを確認する
・無資格者は資格取得
　自社の資格取得支援制度への推薦
・夜間勤務を体験
　チューター制度で２回体験する
・非常勤から常勤正社員へ
　三者面談で協議して決定した

（活動の成果と評価）
・実習期間中に雇用希望者と事業所が「働いてみたい（働いてほしい）」と双方の思いがマッチングできるのか、職員も含めて取り組んでいくことが大切だと感じた。
・雇用後も三者面談等を定期的におこないキャリアパスを参照し「目指す介護従事者」を伝えると共に、本人の「仕事以外の目標等」も引き出し「～がしたい」と思えるような自律心を促した。
・以前は「障碍者雇用だから」と介護従事者として必要なスキルを教育してこなかった風潮がなくなり「新人職員へ教える」環境へ変化した。

（今後の課題・考察・まとめ）
・入職当初に悩んでいたのは認知症ケアへの適応。振り返ってみると現場 OJT に頼りすぎていた。研修を実習中におこなったがもう少し時間を確保しても良かった。
・働き方も多様化する現代社会の中で「～だから」と捉えずに「一緒に働く仲間」と職員間で意識付けすることは、働きやすい職場作りにおいても重要であり、介護現場におけるチームケアの一環にも繋がると考えられる。
・様々な業種での人手不足が懸念され、介護の担い手不足も解消されない中で「介護の仕事に就いてみたい」とチャレンジする数少ない方々と適切に向き合い「介護従事者」を育成できる事業所作りを今後も職員と協力しながら目指していきたい。

演題番号
F－⑬

外国人労働者の離職対策と処遇改善計画

外国人スタッフ育成とユニット連携の両輪

◆キーワード
1　外国人介護人材
2　外国人スタッフ育成
3　多文化共生

宮城県塩竈市

うめのみやまみ-ほ-む
梅の宮マミーホーム

おおにしみう
発表者：ユキ・大西美羽・スイ

宮城県塩竈市に位置する認知症対応型共同生活介護さくら、ひまわりの2ユニット。塩竈の海と街並みを望める環境は当ホームの特色である。	理念　1 皆様の尊厳および権利を尊重します。 2 皆様に平等に対応します。 3 自己の能力を磨きます。

（取り組んだ課題・はじめに）
本施設では近年、外国人介護職員の離職が継続的な課題となっている。退職事例の分析から見出した四つの主要因と、それに対応する処遇改善計画を報告する。
【退職原因】冬季の徒歩通勤負担、夜勤不可による昇給停滞と意欲低下、日本語・介護能力の基準未達、そして「基準を満たせるはず」という思い込みと現実のギャップ、の四点であった。
【対応方針】通勤・住居・評価の三本柱で処遇改善を進める。
・通勤支援：施設徒歩 20 分以内の居住を推奨し、バイク通勤を支援する。
・住居支援：施設徒歩 20 分圏内の民間アパートまたは市営住宅への入居を斡旋し、法人として家賃補助を実施。本人負担を月 1 万 5 千円以下に抑える方針とする。
・評価・説明の明確化：目標基準を事前にしっかり説明し、納得感を高める。個別評価（日本人・外国人区別なし）に納得できず退職を選ぶケースはやむを得ないと認識する。

（倫理的配慮）
本報告は施設内の運営改善に関する取り組みの整理であり、利用者個人を特定する情報は含まない。スタッフに関する記述は役職および集団的傾向のみを示し、個人名・個別評価結果の詳細は公表しない。発表内容については法人理事長および現場管理者の確認のもと整理した。

（具体的な取り組み）
【実施時期】令和 8 年 6 月より、ユニットのサブリーダーにミャンマー人スタッフを選任する。
【サブリーダーに求められる役割】
・業務を正確かつ高水準でこなすこと。
・他スタッフへの指導力・教育力を有すること。
・日本人スタッフと外国人スタッフの連携を橋渡しする役割。
・必要に応じて通訳を行い、小さな誤解や摩擦を未然に防ぐこと。
【期待される効果】
・本人の自己成長・自覚の促進。
・外国人スタッフ全体に「頑張ればリーダーになれる」という希望とモチベーションの付与。

（活動の成果と評価）
本計画は令和 8 年 6 月の実施に向けて準備段階にある。以下を当面の達成目標として進捗を管理する。
・施設から徒歩 20 分以内の住居情報を収集し、希望スタッフへの案内体制を整備する。
・家賃補助制度の詳細（上限・申請手続き等）を法人内で正式に策定する。
・夜勤・昇給に関する評価基準を文書化し、外国人スタッフへ丁寧に説明する機会を設ける。
・令和 8 年 6 月のサブリーダー就任に向け、対象ミャンマー人スタッフへの事前指導・準備を開始する。

（今後の課題・考察・まとめ）
【今後の課題】3 点挙げる。
(1) 法人財政の持続性：家賃補助・住居紹介は継続負担となるため、利用実績と費用対効果を半年単位で検証する仕組みが必要である。
(2) 評価基準の継続運用：夜勤・日本語要件の見直しを含む継続的な対話の場の設置が求められる。
(3) サブリーダー選任の事前準備：令和 8 年 6 月実施までに十分な準備期間と、日本人・外国人双方への周知・メンタリング体制の確保が不可欠である。
【まとめ】外国人介護人材の定着は本施設単独で完結する課題ではなく、宮城県内の同業種・同規模の法人間で退去事例や成功施策を共有する地域ネットワークの構築が望まれる。地域包括ケアの一翼を担う外国人介護人材定着モデルとして発信していくことが、本計画の真のまとめと考える。

演題番号
Ｆ－⑭

新米ケアマネ　管理者１年生

～これが管理者か・・・～

◆キーワード
1　業務改善
2　幸せのお手伝い

岐阜県・可児市　　桜ヶ丘（さくらがおか）グループホーム

発表者：管理者・安藤（かんりしゃ　あんどう）　知里（ちさと）

共同研究者：　鈴村（すずむら）　寛明（ひろあき）

認知症対応型共同生活介護 ２ユニット　　定員１８名 同敷地内に住宅型有料・デイサービス併設あり	お花見・紅葉狩りツアーなどの外出の機会や、 春祭り・田楽大会・夏祭り・秋の味覚祭など季節ごとで家族様に参加していただける行事を行っている。

（取り組んだ課題・はじめに）

デイサービス勤務７年目のある日、敷地内グループホーム管理者のお話をいただき、驚きと戸惑いがあり２カ月悩みましたが、新たな挑戦と考えお受けすることにしました。着任にあたって私が立てた目標は「既存のスタッフとコミュニケーションを取りながら働きやすい環境づくりをし、笑顔があふれる施設にしたい」でした。

（倫理的配慮）

今回の発表にあたり利用者様、家族様、スタッフに写真や記録を使用させていただきたい旨を説明し、承諾をいただいた。

（具体的な取り組み）

① まずは現状把握から始める。このホームの良いところ、改善したいところをスタッフに聞き取りする。やりたい取り組みや利用者様との関わり方についての思いを聞く。またこれからどうして行きたいか自分の考えを全員に話す。

② 管理者がやること、社長に相談すること、スタッフにお願いすること・・と誰が対応するのかを分類した。管理者はあらゆることの状況を知っておく必要があり、費用や備品など環境的なことに関しては社長にご相談し検討いただく。スタッフは利用者様、利用者様ご家族様の望む暮らしを実現するため一番近くで関わる。

③ スタッフにとって時間と精神的負荷がかかっていた業務の改善に取り組んだ。タブレットによる介護記録入力をすることで日本語が堪能でない外国人スタッフもローマ字入力で同じように介護記録を残せるようになり利用者様と関わる時間が増えた。また服薬準備をスムーズにするよう薬局さんに相談した。それまでは２週間に１度、１フロア９名分をまとめて配達してもらいスタッフの手で分けていたのを、日ごと朝・昼・夕・眠前に分けて設置してもらえるように変更した。

（活動の成果と評価）

スタッフから聞き出せたプラスとマイナスの思いを課題ととらえ改善できたことで、言えば形になるんだとスタッフのモチベーションが上がった。

タブレット入力により介護記録がスムーズに進み、利用者様と関わる時間を多く取れるようになった。配薬を専門職の方にお願いすることでスタッフへの心理的不安が解消された。

外国人スタッフがベテランスタッフと対等に行える業務が増えたことで積極性が出てきた。
日々自分ができることが増えて行くのが楽しいと話してくれる。

（今後の課題・考察・まとめ）

私自身が初めてのグループホーム勤務でありスタッフから学ぶことが多いため、上からの押し付けでなく一緒に考えて試してみることでスタッフの取り組みに対する考え方が変わってきている。

固定観念にとらわれず若いスタッフからの情報も共有しながら新しいことを取り入れて行きたい。

きっかけ作りや提案をすることで、利用者様のために出来ることがあるので仲間と一緒に成長して行けるこれからが楽しみである。

演題番号
Ｆ－⑮

最初はみんなポンコツだった

未経験の人材を一から育てる

◆キーワード
1　人材育成
2　未経験
3　一から育てる

宮城県・仙台市

(有)みどりの風（かぜ）　グループホーム縄文の風（じょうもんのかぜ）

発表者：介護士　長沼（ながぬま）　裕子（ゆうこ）

共同研究者：　大槻（おおつき）　博則（ひろのり）

グループホーム縄文の風	縄文時代から人が住み続ける町、太白区山田地区の 2 ユニット 18 名定員のグループホーム。平成 16 年 10 月 1 日に開設し、今年で 22 年目になります。利用者様は 73 歳～99 歳、平均年齢 87.6 歳、平均介護度 2.33。

（取り組んだ課題・はじめに）
今年４月に入った新人スタッフが試用期間中に退職。「思った仕事とちがった」「プレッシャーを感じた」と後から言われたこともあり、指導者の余裕のなさや指導方法が新人スタッフの定着に影響すると学んだ。それでも現在のスタッフは大多数が未経験・無資格の「ポンコツ」からスタートし、勤続年数１０年以上のベテランが約３割。一体どんな理由で続けられたのか。先輩スタッフが新人の特性を見極め、スモールステップで成長を見守り、声がけの工夫で力づけられたら定着につながるのではと考えた。

（倫理的配慮）
写真を掲載する場合は、個人が特定される顔や名前等が写らないよう配慮してあります。

（具体的な取り組み）
新人スタッフへの声がけの工夫は①丁寧に、何度でも伝える②日々小さな目標を立て、前回できなかったところをできるようにする（指導するスタッフ同士も連携する）③手を貸しすぎず見守る④完璧な人はいない、誰でもミスはあることを伝える⑤利用者様とスタッフの安全を第一に、無理はしない、の５つを意識して指導する。入社後３日目、７日目、１か月、２か月と、節目ごとに困りごとはないか、体調に不安はないか等聞き取りを行う。無資格者は本人の意向とシフトを考慮しながら資格取得をし、様子を見ながら少しずつ役割を持ってもらう。また、地域住民と関わりながらホームの存在を広く知ってもらえる活動にも取り組んでおり、中学生の「職場体験実習」、小学生の「まちたんけん」、クレープ屋、子ども食堂の運営にも挑戦している。

（活動の成果と評価）
具体的な取り組み①には、分からないことは何度でも聞いてほしいことを伝える。②は、困りごとや苦手があれば具体的な解決策を共に考えた。業務の方法やケアの技術面で困っているなら、周囲のスタッフにも伝え協力してもらった。悩みがシフトや人間関係の場合は管理者に報告し、挫折しない対策を考えた。③は、先輩が新人の成長を待ち見守る余裕が必要である。④は、ミスがあれば共有し、誰でもミスをするが、同じことを繰り返さない対策を考えてもらった。⑤は、難しいと感じる介助はフォローするので一人で無理をしないよう伝えた。思うようにいかなかったのは、スタッフによって業務の教え方や口調が違い、新人に迷いが見られたこと。また、先輩スタッフが感じる業務のやりがいや働きやすさなどのアンケートを取り、改めてホームのよさや困りごとの有無を聞いた。その結果、やりがいや働きやすさは「衣食住、コミュニケーションなど何でも勉強になる」「家庭的でゆったりとした環境で働ける」「自分の声がけで利用者様が落ち着いた」「入居者様が笑顔になると自分も笑顔になる」「スタッフ皆優しいので助かる」と各々感じてくれている。困りごとでは「(家族の体調不良などで)急な休みを言い出しにくい」「夜勤で一人勤務が不安」等の回答で課題も見えたため、改善が必要である。やる気を削がない声がけと働きやすさを感じてもらうことで、４月以降に入った新人スタッフは現在離職していない。

（今後の課題・考察・まとめ）
新人スタッフの指導は、教える側も指導力を積み上げ成長できるよい機会となる。今後も働きやすい環境作りを目指すために、業務のやりがいやスタッフのいいところを互いに認め、素直に言葉で伝えていきたい。元ポンコツはポンコツの気持ちが分かる。しかし自分もそんな時代があったことを、徐々に忘れていく。「自分もはじめはポンコツだった、でもここまで育ててくれた」と初心に戻り、周囲に感謝の気持ちを忘れないスタッフは定着し、余裕を持って優しい気持ちで後輩を指導できる。優しさはよい雰囲気を生み、利用者様やそのご家族にも伝わり、最善のケアにつながっていく。

（参考・文献など）無し